

# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス'90秋

●学生の席から大学の授業を見れば

=第27回大学教員懇談会=

●よりよい大学教育の方法を求めて

=第152回大学共同セミナー=

●ソ連・東欧の変貌

●追想 故 小川芳男先生とJACET夏期セミナー



①イヌダテ



②カシワバハグマ



③キンミズヒキ



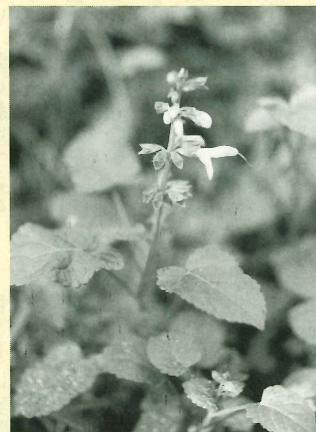
④ナンバンギセル



⑤シラヤマギク



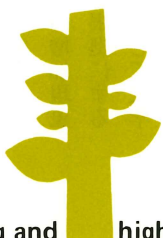
⑥オケラ



⑦キバナアキギリ



⑧ヤマホトトギス



# 学生の席から大学の授業を見れば

——大学教授法をめぐって——

千葉大学教養部助教授 山内 正平

学生との年齢差を意識し始めて以来この数年、私は、大学生協の運営に関わるなどしながら、日頃、学生との接触をなるべく持つとうと心がけてきた。そうした個人的体験から、現在の大学の授業について私見を述べてみたいと思う。

## 大学の肥大化

昨今の大学問題は、学生数の増加に伴う大衆化が大学教育に質的变化をもたらした、というコンテキストで論じられ、学生の質的变化にすべての事柄を転嫁していることが多い。が、果たしてそれでよいのだろうか。私はあえて大学の肥大化と言わずに、大学の肥大化と呼びたい。それは次のように考えるからである。

私が学生時代を過ごした二十年程前に、「大衆団交」という言葉がキャンパスに飛び交った。すでに大学生生活者は大衆であった。教室では「ダイヘン」もあったし、カンニングや授業中のおしゃべりもあった。それ以降、大学の教室の雰囲気はさして変わっているとは思えない。今、一体何が変わったのであろうか。資料によれば、大学の進学率が急激な伸びを示すのは一九七〇年代であり、最近、第二次ベビーブームによる急増はあるが、学生数の増加は決して今始まったことではない。

一方、大学の教員数は六六年から七五年にかけての十年間には余り増えておらず、六五年の数値のほぼ倍になるのは八五年頃である。多分、大学教育の現場の問題点は何かと言えば、かつての汚染された教室で学生時代

を過ごした教員が、今まさに教壇に立っているということである。この事実を確認することから出発しなければならぬ。

大学の量的拡大は、個別大学に何をもちらしているのか。私が勤務している千葉大学を例に引きながら、大学の肥大化が大学教育にもたらしているもの一端に触れてみたいと思う。私が講師として勤め始めた七五年では、

当時の学長は一、五〇〇人を適正規模であると説明していた。現在、学生数は、臨時増を含めて二、六〇〇人になっている。その間、教員数は教養部で六〇人から一二〇人へと倍増した。教員数が増えたということは、それだけ教育に関する論議の密度が薄くなったことを意味する。教員同士は名前を覚えておらず、キャンパスで会っても互いに挨拶をしないこともめずらしくはない。隣の教室でどのような授業が行なわれているか知らないし、また関心もない。教授会の一部の人の発言で終始し、若い教員はほとんど発言しない。いねむり、内職はあたりまえ、ときには私語も混じる。従って、教授会の運営はかならずしも順調には進行しない。かくして大学教育は放置される。これが肥大化した大学教育の姿である。

勿論、我々教員は大学の肥大化の中で、手をこまねいていたばかりではない。低学年用のセミナーを実施したり、総合科目を積極的に開講するなど、現在の大学設置基準の枠内で様々な改革を試みてきたが、大学の肥大化のスピードに追いついていかない、という状況である。

しかし、第二次ベビーブームも頂点にさし

かかったいま、大学教育は新たな転機を迎え、FD (Faculty Development) への期待も増している。そしてFD活動が必要であるというときに重要なのは、単に進学率の増加現象のみを問題とする大学の肥大化を根拠にするのではなく、我々教員自身の問題として大学教育の現在を捉える論理をたてることではないだろうか。

## 授業評価としての裏ガイダンス

さて、多くの大学で学生が新入生のために自主的に授業ガイダンスを実施している。しばしば「裏ガイダンス」と呼ばれる、いわば隠れ授業評価である。教員の目に触れることはめつたにない。私の知る範囲で言えば、科目ごとに実際に授業を受けた学生の記述によって、どの授業が「おいしい」かが親切丁寧に案内されている。単位の取りやすい科目という視点ばかりでなく、「楽をしたい人」向き、「勉強したい人」向き、「標準的な」コースなどのモデルコースも示されたりする。学生は裏ガイダンスに従って楽なところ楽なところへ走る、という批判もあるが、トータルに見ると、授業から何が得られるかというまともな関心も強く、多くの場合、そこに示される容赦ない記述は率直に言って正鵠を得ており、我々教員の「表」のガイダンスは一体、何なのだろうか、という気さえするのである。

しかし「裏」は「裏」なので、私としては裏ガイダンスをなんとか表の授業改革につなげたい。そこで「一緒にやろう」と学生に言うのと、「えっ、何をやるんですか」という答



えがかえってくる。この意識の差は極めて大きい。私は何も世代論で片づけるつもりはないが、この世代の多くは物事を変えようとする意志がないというよりも、それ以前のこととして、現状が変わるといふ発想をしないのである。偏差値教育から解放された学生たちは、与えられた自由に困惑し、右往左往のあげくアルバイトやサークル活動に励み、消費生活を満喫している。大学とはこんなものだと安易に満足する。しかし、自分たちの手で大学教育を変えようのことに気づけば、変革のうねりが生じるかもしれない。

### 学生不在の教授法論議にならないために

最近の出版物の中で、桂文珍氏の『日本の大学』（PHP研究所）は、現代学生論として一読の価値がある。この中で、「休講が多く、教室に遅れて来て、早く終って、講義は面白く、要点をばしっと押え、そして試験が簡単」といふ先生が「一番いい先生」と書かれている。学生の一番欲しているところは、中でも「講義が面白く、要点をばしっと押えて」というところであろう。それさえあれば、休講がなくても、講義が時間どおり始まって、別に不満を覚える理由はない。実際、私の経験から言っても、大学の授業はそういう意味で面白くなかった。要点が明確でない授業が一年間ダラダラ続くというなら、半期制の導入を真剣に考えてはどうだろう。九〇分の授業をまるごと集中するのも至難である。九〇分をどう配分するか、メリハリをどこに置けるか。楽な方へと流れる学生の行動は、かれら

の授業に対するせめてもの抵抗だと言えなくもない。

学生不在の教育論議に陥らないために、我々のなすべきことはまだある。例えば「本を読まない学生が多い」と言うとき、本を読ませる工夫をしない教員がそれ以上に多いことに気づくべきである。学生は教師からの本の推薦を待っている。その場合に肝心なのは、そのあとのフォローである。

また「学生は文章が下手だ」と言うならば、少なくとも学生のレポートを斜め読みをしないくらいの礼儀は必要だろうし、レポートに対して何らかのフィードバックがなされなければならぬだろう。授業の準備に時間と労力をかけても、フィードバックの量が少ないと、これだけやっているのに、なぜ駄目なのだろう、という教員の側の不満と不安がますます増大していくように思われる。

### FD活動への期待

言うまでもなく、教室が聖域として閉じられてはならない。大学ではいい加減な教師でも、カルチャーセンターでは律儀で熱心な教師であることが多い。自己管理は教員にとってもむずかしいのである。大学は、教員の自己相対化を可能にするような授業空間の開放に、組織的に取り組む努力をすべきである。同僚教員、社会人等の聴講者が学生の席に混じれば、授業空間に緊張が生じる。そうした開かれた教室の実現は、基本的なところで、大学教員の資質開発、大学教育の活性化に大きな役割を演じるはずである。

大衆化した大学では、教員は匿名のまま大学教育に従事し、学生は匿名のまま卒業する。大衆化した大学教育では、個性的な授業よりも均質の授業が求められる。大学を汚染している「マニュアル症候群」はこの辺りのことと無関係ではあるまい。

私自身の経験では、三〇歳前半までは、「一体、先生は何を言おうとしているのだろう」と、私の授業に聞き耳をたてていた学生が何人かは必ずいたし、授業が終了すると、別に質問があるわけではないが、しゃべりに来て、何かと接触を持ちたがる者もいた。ところが、自分の息子や娘が成長してくると、ある日突然、この学生たちは自分の子供と同世代であることに気づいて、急に子供にとり入るようになり、今日はスライドを見せてやろう、次回はプリントを少し多くしよう、とかいろいろ授業を脚色する。そういう意味で授業は手馴れてくる。しかし、学生たちはそういう努力をどう評価しているのか、私には全くわからない。その辺の不安がマニュアル指向につながっていくとも言えるだろう。初任者研修ばかりがFDではない。

このように教授法の問題は、教科教育法の問題ではなく、別のところに存在している。それは、いわば大学という生活の場で、教師が学生と共有できる「ことば」を見出せるかどうかの問題である。その「ことば」は教授法の標準的マニュアルには多分でない。すなわち、授業の実践において、いかに個性の差異を主張しうるか、という能力開発が期待されなければ、FD活動に魅力はない。

(文責・編集者)

# 第27回 大学教員 懇談会

## 主題

# よりよい大学教育の 方法を求めて

期 日  
'90.9.29~30

### ▼セッションI・パネル(1)

「大学教授法をめぐって」

- 1 大学の教育機能について  
放送教育開発センター教授

東京女子大学文理学部教授

福田一郎氏

お茶の水女子大学家政学部教授

中島利誠氏

- 2 専門教育のカリキュラム——教養の

理系科目と専門基礎教育科目の有機  
的結合——

喜多村和之氏

東京工業大学工学部助教

原科幸彦氏

電気通信大学電気通信学部教授

中田良平氏

- 3 大人教講義を担当して——単位制度

1 自己評価——学生による授業評価の  
性質——

性質——

中島利誠氏

千葉大学教養部助教

### ▼参加者63名(28校)

(運営委員・講師を含む)

立教(6)、国基督教(5)、東京工業・上智

(各4)、電気通信・中央・東京女子・武

蔵工業・明治学院(各3名)、筑波・千

葉・東京都立・大妻女子・成蹊・法政・

東海・防衛・産能短期(各2)、北海道・

図書館情報・埼玉・東京学芸・お茶の水

女子・千葉工業・工学院・日本女子・早

稲田・東京純心女子短期(各1)、その他

(1)



FD (Faculty Development) 教授団

の資質開発)のためのプログラムは、一

昨年の第25回懇談会で実施したアン

ケートの結果を受けて、大学教員懇談会

企画委員会の検討課題となり、昨年1月、

委員会内部に設置された「FDプログラ

ム小委員会」で約一年に及ぶ計画立案の

作業が進められた。前回の懇談会「大学

教員の魅力開発——FDプログラムの実

践」は、こうした手探りの作業の中から

生まれた、おそらく全国でも初めての大

学教員研修プログラムであった。

2回目にあたる今回の企画は、参加者

が相互に討論を行なえるように分科会に

力点を置き、ファシリテーター6名を配

したことで、「教授法」の理論よりは、具

体例を豊富に提示できるように、2回の

パネル・ディスカッションを組み入れた

ことに特色がある。

このため、ファシリテーターや発題者

にはFDプログラム小委員会のメンバー

の他に、前回の参加者の中から適任者を

求め、合宿を含む4回の拡大小委員会を

開催して議論を積み重ねてきた。因みに

今年度には、別項(8頁参照)に詳報があ

るように、「大学教員懇談会企画委員会

内規」にFDプログラム小委員会が正式

に規定されるに至り、懇談会の新しい活

動を担うこの小委員会への期待は大きい。

この紙面を借りて、示村悦二郎・早稲

田大学教授を委員長とするFDプログラ

ム小委員会の委員各位のご尽力と、今回

企画された発題者・ファシリテーターの

方々のご協力に対して、改めて感謝の意

を表す次第である。



セッションIでは別記のように四つの

発題が行なわれた。まず最初に、わが国

の大学教育研究の第一人者で、発題者の

中で唯一人、懇談会の「外部」から参加

された喜多村和之氏が、大学の歴史や高

等教育の現状分析をもとに次のように言

われた。中世以来、最もポピュラーな授

業形態である講義(lecture)は、まとも

た知識の伝達に便利なゆえに普遍性を獲

得したが、講義が成立するには、学生が

自学自習者であることが前提であり、18

歳人口の37%が進学する大学教育の現場

には、到底適合できない。新制大学への

移行時に、教授法に真剣に取り組みべき

であったのに、大学教員はそれを怠って

きた。知識の殿堂は大学にしか存在しな

の空洞化はこうして食い止める——

- 立教大学一般教育部教授 鈴木正男氏

- 4 学生の席から大学の授業を見れば

千葉大学教養部助教 山内正平氏

### ▼セッションII・ワークショップ(分科会)

- 1 人文・社会科学系

(ファシリテーター)

上智大学外国語学部教授 蟻山道雄氏

中央大学法学部教授 中西又三氏

上智大学文学部教授 越前喜六氏

- 2 自然科学系

(ファシリテーター)

東海大学理学部教授

- 2 大学教員の評価

国際基督教大学教養学部教授

3 自己評価の基本的視点——国立大学  
協会の最近の調査から——

北海道大学文学部助教 坂井昭宏氏

▼運営委員

《委員長》

東京工業大学工学部助教 原科幸彦氏

東京女子大学文理学部教授 福田一郎氏

お茶の水女子大学家政学部教授

お茶の水女子大学家政学部教授

いという時代は過ぎ去り、研究対象と授業の内容が一致する幸福な時代を取り戻すことも不可能となった。大学の興亡史は、サバイバルの危機に直面して、大学がどれだけの努力を傾注したかを、今日の我々に示してくれているわけで、今こそ大学が大学であることの証しを教育機能の充実の中に示せ、という喜多村氏のメッセージでもあった。

次に、理工系の学部教育において、偏差値で輪切りにされた入学者が専門教育に及ぼしている問題点について、中田良平氏が次のように発題された。教養課程の理系科目（数学、物理、化学）を暗記科目のように考えて単位を取るケースが、最近目立っており、それらの科目を専門基礎科目と考えている専門課程の教員との間に、大きな意識の差が生じている。入学直後のオリエンテーションが十分なされなくてはならないが、より根本的には「専門一貫教育」への組織編成が有効な解決策ではないかと指摘された。

一方、大学教授法が最も問われている「大人教講義」（大学設置基準に定められた「授業の基準」を超えた二〇一人以上の講義をいう）について、鈴木正男氏は、私語の増加・出席率の低下、フィードバックの欠如など単位制度の空洞化を起し易い条件を少しでも改善する方策がとられるべきだとして、①カリキュラム開発と②教授法の開発の二点をあげられた。①では半期制の導入、一年次ゼミナールの設置、一般教育のコア化、②では大学

教員マニュアルの作成、OHPやスライドなどによる教授法や教育内容、評価基準に関する教員の情報交換などが提起された。

また、学生から見た授業という視点で、別掲（2〜3頁を参照）のように、山内正平氏が大学教員の努力の必要性を呼びかけた。



最終セッションⅣのパネルは、評価の問題をめぐって、三人の発題が行なわれた。まず、東海大学が行なっている学生による授業評価の実際を、安岡高志氏が報告された。教員に強い抵抗のある学生評価に対する拒否理由の一つ一つを（例えば、クラスや学生の質、小人数や大人数講義、教員歴や年齢などで学生の評価に差が出るという主張、詳細なデータ解析によって崩していく手法は見事であった。そこで明らかとなったのは、講義については、その内容と質が問われること、明解性と構成力があれば、その他の要因はほとんど関係がないという点であった。

次に、大学教員の自己評価について、絹川正吉氏は「教育業績に対する評価と研究業績に対する評価を調和させるものにする必要」が求められており、「教員の教育能力の評価の第一の目的は、教育の質の改善と向上」にあり、「評価される教員がその評価によって、教育能力の向上に自律的に努めることが前提となる」と述べられた。先の学生の授業評価にしても、それについての専門家である

⑤

教員から他の教員が助言を受けるシステムが必要なのであり、教員の自己評価、学生の授業評価、教授会や学科主任の決議機関の三者が往き来する場の総体が昇進等の評価に接続するようなシステムを開発することが、日本の大学では緊急の課題である。さらに教員評価で大事なことは、大学がシステムとしてどのような〈場〉を持っているか、〈私〉である教員が大学とどのような関係に位置しているかを明確にすることであり、まずは大学が表現している教育理念に対するコミットメントを持つことが、FDの第一歩であろう、という絹川氏の指摘は、改めて日本の大学が抱えている問題の根の深さを感じさせた。

三番目は大学評価の問題である。坂井昭宏氏は、「カリキュラム開発から見た大学教育の自己評価」という視点で、国大協の「教養課程教育の改善に関する実情調査」に基づき、「評価項目」として何が必要かについて言及された。カリ



自然科学系の合同分科会（記念館セミナー室）

キュラムは単なる授業科目の寄せ集めではなく、各大学の学部教育の目的に関わるから、カリキュラムの編成方針や大学教育の構成要素など全体の関連が見えてくるものでなければならぬことを強調された。



セッションⅡとⅢにおいては、人文・社会科学系3グループと自然科学系3グループのワークショップが行なわれ（Ⅲでは、各3グループが合同して行なわれた）、参加者が教育現場で抱えている問題を話し合い、経験を共有した。

参加者自身による今回のFDプログラムの自己評価は、概ね好評であり、ここで得たことを自分の教育現場で取り入れようと考えている、と回答した教員も多かった。具体的な要望としては、ワークショップは授業形態の種類に応じてもつと細分化した方がよい、視聴覚機器の使用法も取り入れてほしい、等が寄せられている。今後、FDプログラムの活動は、各専門分野を超えて共同できる主題をしばり込みながら、「ノウハウ」を確立していくための工夫が一段と必要とされる段階に入ってきたように思われる。

なお、この懇談会の詳細については、『第27回大学教員懇談会記録』（91年3月刊行予定、企画室編）をご覧いただきたい。また、大学教員のための『マニュアル』の続編の編集が、FDプログラム小委員会が現在進行中であることを付け加えておきたい。

## ▼全体講義

東欧の変貌においてなにが問われているのか

神戸大学法学部教授 木戸 蒨氏

## ▼ゲスト講演

壁をめぐる雑感 作家 島田雅彦氏

## ▼シンポジウムの発題

中欧の復活

国際地域研究センター所長 加藤雅彦氏

## ▼セクション指導と講義

加藤雅彦氏

E チャウシエスク政権下のルーマニア

——民族主義と文化——

文化女子大学家政学部教授

直野 敦氏

F ユーゴスラヴィア——その「改革」と民族問題——

敬愛大学経済学部助教授 柴 宜弘氏

▼運営委員

東京大学文学部教授 川端香男里氏

▼参加者102名(内女子47名)

東京(21)、上智(8)、早稲田(7)、

# 第152回 大学共同 セミナー

——主題——

## ソ連・東欧の変貌

期 日  
'90.6.15~17

A ソ連の変化と東欧

法政大学法学部教授 下斗米伸夫氏

B ポーランドと東ドイツ——歴史の陥

穽と未来の挑戦のあいだで——

北海道大学スラブ研究センター教授

伊東孝之氏

C 東西の懸け橋、プラハに吹きつける

東風と西風

筑波大学国際関係学類助教授

秋野 豊氏

D ハンガリーの改革と人民主義

千葉大学文学部教授 南塚信吾氏

筑波・東京外国語(各6)、慶応義塾・津田塾・明治(各5)、中央(4)、日本女子(3)、埼玉・一橋・青山学院・成蹊・東京経済・法政・明治学院・都立商科(各2)、杏林・駒沢・帝京・東京女子・独協・東京国際・産業能率(各1)、その他(9)、以上25校

◇

一九八九年十一月、東西の冷戦構造を象徴するベルリンの壁がいとも簡単に崩れ去った。ソ連・東欧の研究者すら予想だにできなかった出来事であった。ベルリ

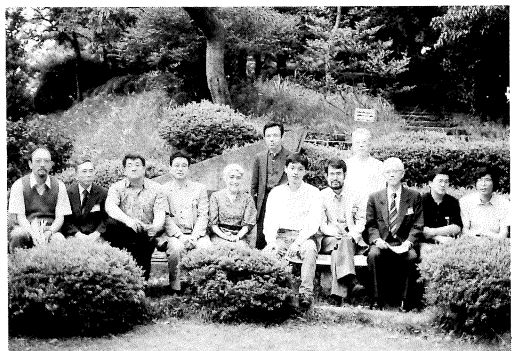
ンの壁に象徴される東欧の大激変は、いかなる原因によって引き起こされ、現状はどうなっているのか、そしてこれからどういう方向を目指そうとしているのか。

資本主義が勝利し、歴史は終焉したのか。歴史の分岐点に遭遇している私たちは、社会主義の葬送曲を奏でる前に、日々刻々と変貌を遂げているソ連・東欧の情勢を冷静に見つめる必要がある。このセミナーの主旨は、日々の情勢分析や現象の解説に追われることなく、東欧の国々について理解を深めつつ、これらの国々の焦眉の急の問題をヨーロッパの歴史の大きな流れの中で、巨視的に考えてみることである。

◇

セミナーの冒頭、ソ連・東欧の変貌が持っている意味についてソ連・東欧研究の第一人者である木戸氏は、ご自身の東欧研究史を振り返りながら次のように問いかけた。「社会主義の実験が失敗し、資本主義が勝利したといえるのか。効率と競争という原理がすべての社会の原理として有効であったと言い切れるのか。資本主義自身がすでに公正、平等、福祉という社会主義の原理を取り込んで変質してしまっている。従って、完成された二つの体制があつてその優劣を争うのではなく、両者を相対化するような価値交錯的な実験の過程こそが求められるべきではないか」

二日目のゲスト講演の中で、新進気鋭



前列左より南塚、直野、秋野、川端、岡、島田、伊東、加藤、下斗米、柴の諸氏。

の作家で東欧に詳しい島田氏は「ベルリンの壁の崩壊に象徴される出来事の中で、国家がもはや単なる移住者を送り出したり、それを受け入れたりする機関にすぎないということが明らかにになった。ウィーンやベルリンは今や「動く群衆」のバビロンになりつつある」と述べ、「これからは国境は「牢獄」としてではなく、「網戸」として捉えて、国境を自由に往来する移動する民衆の一人でありたい」と巧みな話術で混迷の続く東欧を旅された体験を語られた。

またシンポジウムの発題の中で、加藤氏は、「東欧」崩壊後に来るヨーロッパの新しい秩序について「中欧」(ミッテル・ヨーロッパ)の抹殺の上に成り立っているヤルタ体制が崩壊した今、単なる地理的概念としてではなく、ヨーロッパの中央に位置する伝統的な歴史的、文化的共同体として、こちらの国々が数世紀来の

親和力によって再びあい接近するのは、全く自然な歴史の流れである」と、ヨーロッパの深層部分を流れる底流を説明しながら、「中欧の復活」を展望された。

プログラムでは、ポーランド、東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビアの改革の現状とその行方、そして東欧の市民革命がソ連のペレストロイカに及ぼした影響と東欧の変化を加速させたソ連外交の政策転換などについて、社会主義の運命を導きの

### 参加学生の感想から

#### 大きな「カルチャーショック」

早稲田大学政治経済学部1年

森原 康夫

昨年来の、あの世界史上に記されるであろう東欧社会の変動はドラマチックかつドラマチックであった。しかし、その一方で新聞、テレビ等では煽情的な報道ばかりが先行し、どうして、どうやって、どのように、その変動が起きたか、の冷静な分析はあまりみられなかったように思う。そういう意味で、一度じっくりと冷静な分析でやや突き放すような形で今日の変貌というものを、確かめてみたかった。

実際参加してみて、私は大きな「カルチャーショック」のような衝撃を受けた。それは2日間、夜に行なわれたセクション毎の討論であった。私は他人より多少は東欧問題について知っていたつもりでいたのが、物の見事にそれは幻想であることが露呈してしまったのである。すなわち、他の人たちがこの問題について、深く、詳しく、断片的でなく知識を持っていたのであり、私自身は単なる浅薄な、断片的な知識しか持っていないことが身

糸としながら各国別に分かれて白熱した討論が展開されたが、紙面の都合で割愛する。



東欧をこのように大きく変貌させ、またその変化を加速させたのは、ゴルバチョフ政権のペレストロイカ政策であった。武力で優劣が決められなくなった世界の中で経済は唯一の競争の場となったが、ソ連の経済的な破綻は誰の目にも明らかとなってしまった。「ポスト工業

をもつてわかった。これは大いにショックであった。確かによく知っている人たちは、三年、四年生が多いし、私自身はまだ一年だから、といってしまうまでもだが、このまま同じ生活をつづけていたらきっと進歩もなく、知識もなく大学生活は終わってしまうに違いない、と思った。その意味でとてもいい刺激を受けたと思う。

#### 強烈なパンチ、熱烈な向学心

日本女子大学文学部3年

秋野佐代子

単刀直入に言って私は不勉強だった。その不勉強は、手厳しいパンチとなって現れた。その強烈なパンチとは、他の学生達の深い知識と熱烈な向学心、そして真理を追求しようとする真剣そのものの姿勢である。つまり私はそれらに、こてんぱんにやられたのである。どうも、学ぶという姿勢からして、私は誤っていたようにだ。

私の所属していたFセクションは、ユーゴスラビアの体制とその将来について探究を深めた。ユーゴは、自主管理体制と非同盟を二本柱とする、独自の社会主義の道を歩み現在に至る国である。この国を理解するために、ある大学院生の言葉を借りよう。「ユーゴは、

化社会では、国家が主導権を握る形では運営できない。ソ連は決定的に第三次産業革命に乗り遅れてしまっている」(下斗米氏)。ソ連のくびきから解放された東欧諸国は、少なくともソ連の死活的な安全保障上の利益を損なわない限り、自分で自分の運命が決められるようになってきた。

「党の指導的役割」の放棄、「自由選挙」など矢継ぎ早に体制変革が進行している中で、私たちは遅れていた東欧がようやく

東ヨーロッパの中では、目立たない国かもしれないが、平和的貢献という立場から考えると、急に浮上してくる。これが一番胸に残っている。ユーゴと頭の深さ、おもしろさ、重要性が、一気に頭の中を駆けめぐり、私を威圧し始めたのである。2日にわたる演習は、私に恥と刺激とヤル気をもたらしただけである。ただ気にかかったことは、このテーマがほとんど経済面、政治面で語られていたことである。プラッサを重要視してない姿勢に、少々、片手落ちのイメージをもった。これを論理的に説明できたら、と自分の不勉強を呪わしく思った。しかしこの悔恨は今後の私にとって課題にもなる。私は一人の文学研究者として、ソ連や東欧諸国の文学を研究し、自己論を創り、文学的側面から社会主義を論ずるのだ。これは、素晴らしい目標、大収穫である。いつてみれば、不勉強転じて福来たる、といった感じがする。

#### 互いに論議し切磋琢磨する

筑波大学国際関係学類3年

伊藤 庄一

私にとってこの大学共同セミナーは初めての参加であった。非常に白熱した3日間となり、論議を尽くすには余りにも時間的制約が大きかった。全体を通して問題の中心となっ

く日本に追いついてきたというような傍観者の眼ではなく、新たな歴史の芽をそこにとらえること、そしてそれを、冷戦後の世界秩序の中における日本のグローバル・ストラテジーを模索していく上で重要な出来事として、注視していかなければならないだろう。「歴史の中に生きていく」という実感(直野氏)と、世界史が日々揺れ動いているという張りつめた空気が漂う中で開催されたセミナーであった。

たことは、「一体社会主義とは何か」ということであった。この課題に関心を寄せる人ほど、容易に資本主義の勝利ということを叫ばない。何がソ連・東欧における社会主義(ここではスターリン主義と昨年で用いている)を崩壊もしくは変容させ、かつての一連の東欧革命に結び付いたのか、又かつて二度の世界大戦の導火地点となった東欧が、どの様な体制を選択し、いかなる形でヨーロッパ、ひいては世界レベルで組み込まれて行くのか、興味は尽きなかった。

このセミナーの参加者は、元来社会に対して問題意識をもつ学生が多かったとは言え、まるで「日本の大学生は勉強しない」という通説を吹き飛ばしているかのようであった。全体講義を行なって下さった木戸翁教授が言われた「最近、学生が勉強するようになった」という言葉は、このセミナーの参加者の姿を非常によく象徴していた。また国公私立大学各々の枠を超え、明日を担う同世代の若者が問題意識を携えて、互いに論議を交わし、切磋琢磨する機会は今日の日本社会では他に比類するものが見出せない現在、この大学共同セミナーの稀少価値は非常に高い。大学共同セミナーのさらなる普及と、今後一人でも多くの学生が有形・無形に啓発されていくことを期待したい。

平成2年度

第1回大学教員懇談会企画委員会

FDプログラム小委員会を

正式に設置

90年6月7日/アルカディア市ヶ谷

〔出席者〕小池生夫、蠟山道雄、示村悦二郎、原科幸彦、平木典子、岡村浩、高倉翔、中田良平、福田一郎、前沢三郎、大口勇次郎、西脇威夫、建部正義、戸張よし子、平野健一郎、富士昭雄、安岡高志、山内正平、吉野輝雄

(敬称略)

◇ 新年度委員会は新たに11名の委員を迎え、再任13名を合わせた24名の委員で発足した(委員名簿は別掲)。

第1回委員会は別記19名の委員が出席し、以下の議事がはかられたが、冒頭、新旧館長の交替の挨拶が行なわれた。

● 主な議事

(1) 正副委員長を選出

委員長には蠟山道雄、副委員長には示村悦二郎、原科幸彦の各氏が、前期委員会に引続いて選出された。

(2) FDプログラム小委員会の経過報告と第27回懇談会の企画について

FDプログラム小委員会拡大会議(3月18日)で話し合われた第26回懇談会、FDプログラムの実践」の反省点と課題を踏まえて、本年度第1回小委員会(4月25日)においてFDプログラムの継続の必要性を確認、第27回懇談会の企画とし

て実施する方向で準備が進められてきたことが報告され、本年度プログラムの企画として承認した。

(3) 大学教育方法等改善経費について

本年度は東京工業大学の協力で、FDプログラムに文部省補助金が支給される見込みである。

(4) 「大学教員懇談会企画委員会内規」の一部改正について

現行内規に「委員の任期を2年とし、毎年半数を改選する」とあるのを、現状に合わせて、「毎年半数を改選する」を削除する。

また、昨年度から活動しているFDプログラム小委員会の例により、小委員会設置に関する規定を新たに加える。

以上の二点についての事務局提案に併せて、他の条文中の句読点、用語の整理等を行なうこととし、改正案が承認された。

以上の議事を終え、会食に移った。開宴に当り、中川前館長の9年に亘るご指導とご奉仕に感謝して花束の贈呈が行なわれた。

平成2・3年度

大学教員懇談会企画委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

委員長

蠟山道雄

上智大教授(国際政治学)

副委員長・FDプログラム小委員会委員長

示村悦二郎\* 早稲田大教授(制御工学)

〔副委員長〕

原科幸彦\*

東京工業大助教(居住環境計画)

委員

小池生夫

慶応義塾大教授(応用言語学)

宮腰 賢\*

東京学芸大教授(国語学)

神保信一

明治学院大教授(教育心理学)

平木典子

立教大教授(心理臨床)

岡村 浩

工学院大教授(物理学)

高倉 翔

筑波大教授(教育行政学)

中田良平\*

電気通信大教授(電子工学)

福田一郎\*

東京女子大教授(遺伝学)

前沢三郎

成蹊大教授(熱工学)

美濃口武雄

一橋大教授(経済学史)

石黒哲郎

芝浦工業大教授(都市計画)

大口勇次郎

お茶の水女子大教授(史学)

西脇威夫

武蔵工業大教授(橋梁工学)

高橋たまき

日本女子大教授(発達心理学)

建部正義

中央大教授(金融論)

平成2年度

第1回国際プログラム委員会

新委員長に

渡辺昭夫・東京大学教授を選出

90年5月15日/アルカディア市ヶ谷

〔出席者〕菊地靖、宇佐美滋、渡辺昭夫、小野沢正喜、竹田いさみ、中西鈞治、高木誠一郎、田中稔久、富永國子、山本清

(敬称略)

◇ 新年度委員会は新たに7名の委員を迎え、再任11名を合わせた18名で発足した(委員名簿は別掲)。

第1回委員会は前記10名の委員が出席し、以下のように議事が行なわれた。

(1) 正副委員長の選出

○戸張よし子 東京都立大教授(遺伝学)

○平野健一郎 東京大教授(国際関係論)

○富士昭雄 駒沢大教授(国文学)

○安岡高志 東海大教授(化学)

○山内正平\* 千葉大助教(ドイツ文学)

○吉野輝雄 国際基督教大助教(有機化学)

(\*はFDプログラム小委員)

平成2・3年度

FDプログラム小委員会

(大学教員懇談会企画委員の兼任者は省略)

〔副委員長〕

絹川正吉 国際基督教大教授(数学)

委員

坂井昭宏 北海道大助教(西洋哲学)

中島利誠 お茶の水女子大教授(被服科学)

鈴木正男 立教大教授(自然人類学)

委員長には新たに渡辺昭夫氏を、副委員長には前期に引続いて菊地靖、宇佐美滋の両氏を選出した。

(2) 第16回国際学生セミナーの実施報告と「開かれた」日本・総点検」シリーズの総括

(3) 新シリーズの総合テーマと第17回国際学生セミナーの企画について

総合テーマを巡って様々な角度から議論が行なわれ、「世界の構造転換」「開発と地球環境」「地球時代のパラダイムを求めて」などが出されたが、第17回セミナーの運営委員会で検討して決定することになった。

平成2・3年度国際プログラム委員

(就任順、敬称略、○印は新任)



〈委員長〉

渡辺昭夫 東京大教授(国際関係論)

〈副委員長〉

菊地 靖 早稲田大教授(社会人類学)

〈副委員長〉

宇佐美 滋 東京外国語大教授(国際関係論)

〈委員〉

熊田禎宣 東京工業大教授(都市計画)

溝田 勉 ユニセフ駐日代表部副代表

小野沢正喜 筑波大助教授(文化人類学)

竹田いさみ 独協大助教授(国際政治学)

今井圭子 上智大助教授(開発経済論)

ジョン・B・ウエルフィールド 国際大準教授(歴史・国際関係)

添谷芳秀 慶応義塾大講師(国際政治学)

西野文雄 東京大教授(土木工学)

中西和治 文部省学術国際局留学生課長

高木誠一郎 埼玉大教授(国際関係論)

田中稔久 国際交流基金人物交流部受入課長

堀内信介 国際開発高等教育機構専務理事

堀江浩一郎 八千代国際大助教授(国際関係論)

宮永國子 国際基督教大助教授(社会人類学)

山本 清 日本国際教育協会専務理事

平成2年度

第1回共同セミナー委員会

新委員長に

川端香男里・東京大学教授を選出

'90年6月28日/アルカディア市ヶ谷

〔出席者〕 川端香男里、坂本百大、坂部恵、桜井哲夫、袖井孝子、小川捷之、草津攻、西村圭子、五十嵐武士、野崎昭弘、池田清彦、福井憲彦、間宮陽介 (敬称略)

◇ 新年度委員会は5名の新任委員を迎え、別掲の名簿のとおり、合計19名の委員で構成されることになった。

第1回委員会は別記13名の委員が出席し、以下の議事が行なわれた。

(1) 正副委員長の選出

委員長には新たに川端香男里・前年度副委員長を副委員長には桜井哲夫・前年度委員長と野崎昭弘氏を選出した。

(2) 平成2年度プログラムについて 年度前半のプログラムの実施報告と後半の準備状況。

(3) 平成3年度プログラムについて 過去10年間の開催状況、参加状況データをより辿りながら、前年度委員会で議論された大学共同セミナーの方向づけについて、企画室長より概要説明があり、以下を確認した。

平成3年度は本年度に準じ、年4回を組み入れているが、そのうち1回乃至2回は既定方針どおり大学院共同セミナーに重心を置いて企画をたてる。

平成2年度共同セミナー委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

委員長 川端香男里 東京大教授(ロシア文学)

副委員長 桜井哲夫 東京経済大助教授(理論社会学)

野崎昭弘 国際基督教大教授(数学)

栗原 彬 立教大教授(政治社会学)

室田 武 一橋大教授(計量経済学)

坂本百大 青山学院大教授(哲学)

坂部 恵 東京大教授(哲学)

袖井孝子 お茶の水女子大助教授(家族関係学)

小川捷之 上智大教授(臨床心理学)

佐藤敬三 埼玉大教授(科学論)

草津 攻 津田塾大助教授(社会心理学)

西村圭子 日本女子大教授(日本史学)

五十嵐武士 東京大教授(アメリカ政治外交史)

進藤栄一 筑波大助教授(国際政治)

(表紙写真)

秋の八花撰

大学セミナー・ハウスの丘に咲く草花から

撰・解説/東京都立立川短期大学名誉教授 吉田 幸弘

イヌタデ ① 道端や野原に生えるタデ科の一年草で、俗にアカマンマと呼ばれる雑草。穂状に咲く小花が紅白に見える、赤飯のようなのでそんな俗名がついた。

カシワバ ② 山地に生え、夏から秋にかけて花を開くキク科の多年草。和名はカシワの葉に似た葉を着けるハグマの意という。○ハグマと呼ばれる植物は多数あり、いずれも類似の頭花を開く。ハグマ(白熊)は仏教で用いる弘子の材料になる中国に住むヤクの尾の白い毛のことで、この類の小花をハグマに見立てての命名。

キンミズヒキ ③ タデ科にミズヒキという多年草があり、樹下などに生えている。秋に細い花茎をのばし、赤い小花をまばらにつけ、それが水引に似ているのでそう呼ばれる。水引は贈り物をする時、金品を包んだ上に結ぶ紅白の紐であるが、最近では印刷した紙ですませることが多くなり、本物の水引はあまり使われなくなりました。キンミズヒキはタデ科のミズヒキに似ていて黄色の花を咲かせるので、そう呼ばれるのであるが、こちらはバラ科であり、タデ科とは大分類縁が遠い。

ナンバンギセル ④ ハマウツボ科の一年草。種子植物なのに葉緑素を失い、寄生生活をしている。寄生はススキなどイネ科の植物が多く、根に寄生する。横を向いて咲く白地にピンクをおびた花は美しいというのか、珍しいというのか、とにかく奇妙な植物である。和名は外国のキセル、つまりパイプの意である。古名オモイゲサ。

シラヤマギク ⑤ 秋の野山を歩くと、日本中どこにいても咲いているキク科の多年草で、頭花はまわりに白い舌状花をまばらに着け、中心には黄色の管状花が集まっている。和名は山にある白いキクの意。

オケラ ⑥ 秋、白い(ときに淡紅色)頭花を開くキク科の多年草。総苞の下に魚の骨のような数枚の苞がついていて、正月に用いる屠蘇には、本種の地下茎もはいつている。

キバナアキギリ ⑦ シソ科の多年草で、秋に黄色の唇形の花を開く。同属のアキギリは紅紫色の花を着けるが、分布はさまく、東京では見られない。和名はキリ(開花は初夏)のような花を秋に咲かせる植物の意。

ヤマホトトギス ⑧ 丘陵の樹下などに生えるユリ科の多年草。花は上を向いて咲き、花びらもがく片も同様に美しく、白地に紫色の斑点がある。和名は山に咲くホトトギスの意であるが、同属のホトトギスはやはり花びらががく片に斑があり、それが鳥のホトトギスの胸にある斑と似ているのでそう呼ばれるようになったという。

# 千人会

90年6月～8月

◆現在会員一、四六五名(実会員数)

(通算入会者一、八二二名)  
◆新しく会員となられた方々  
A 文化女子大学教授 直野 敦殿

◆会費ありがとうございます。  
松井源吾、小島守生、朝野洋一、野沢浩、古畑和孝、佐藤進、和田英一、大塚博、柴田勇造、市川慎一、島田淳子、安宅光雄、神保信一、望月継治、小倉充夫、福田延衛、角田稔、大内力、北野美枝子、松崎奈岐、合田周平、今堀和友、宗像元介、藤野登、阿久津喜弘、嶺哲之助、猪瀬尚志、岡田正弘、中村幸安、山崎晃、原田富士雄、佐久間まゆみ、直野敦、村崎誠、吉田幸弘、鈴木一郎、川内修司、中野スミ子、秀村欣二、奥村敏恵、土田美芳、宮田登、金子晃、江沢洋、石川信男、阿部亨、百瀬宏、石川達雄、名東孝二、大野京子、末武国弘、伏見康治、白井久和、栗林恒雄、吉松藤子、松尾浩也、林潔、島海俊宏、鈴木二郎、田中未來、川田雄一、讃岐和家、柴田政利、辻達也、慶谷伸代、光延明洋、橋谷卓成、太田正孝、長清子、三浦徳弘、浅川淳、三橋文雄、柏木恵子、和田義信、山西貞、浜川祥枝、金谷憲、入江和生、矢部章彦、中村登志哉、黒田道雄、藤平重雄、築田長世、二谷貞夫、田島恵児、栗原尚子、中村浩三、高橋公雄、梅沢豊、石井進、西村敏男、松島恵、箱木真澄、谷下市松、仁科雄一郎、見田宗介、小池滋、岡沢憲英、橋本研一、橋本智、米村貞蔵、柳下勇、小西悟、竹内喜代司、高橋勇悦、笹森健、吉田美穂子、有末賢、品川孝次、三宅彰、宮本瑞夫、望月一憲、佐藤誠三郎、川合隆男、中島文夫、林俊一、奥田夏子、島山英雄、中村進、川原啓美、古本捷治、石井脩二、芥川龍男、藤原鎮男、窪田富男、五十嵐武士、角浜洋一、森田桐郎、安味貞正、小池生夫、角瀬保雄、原誠、谷口雅男、鈴木成文、仙田哲、加藤幹夫、中山光雄、中村哲哉、三和治、古賀正則、大熊徹、立川明、原島幸太郎、大吉芳彦、林明夫、森川八洲男、永井

裕、滝幸三郎、三輪公忠、十代田知三、加藤榮一、稲田拓、志賀英、岡本哲治、岡本剛、鹿島健次、白濱謙一、浅井邦二、村松暎、海老沢克之、村田光二、熊田禎宣、平井久、原田行男、市川博、福井正紀、宮野三郎、田中弥寿雄、太田善磨、太幡祐己、米山弘、八幡義博、大蔵隆雄、松村信治郎、長内了、伊藤一郎、早弓悖、横田澄司、柳下綱道、新井勝紘、小田切松義、福山仙樹、藤田淑子、井上孝、村上光雄、松瀬貞規、岡村文子、伊藤喜栄、山本茂 (敬称略)

### ◆千人会員からのたより

満九十歳を迎えました。やれやれですが、一九九〇年生れです。一〇〇年生れです。いやいや。会員諸氏よろしく。  
東京医科歯科大学名誉教授 岡田正弘

この4月で日本女子大学に転動しました。新設の日本語教育講座の担当です。  
日本女子大学助教授 佐久間まゆみ

この10月より西独ベルリンへ社会留学することになりました。  
共同通信仙台支社記者 中村登志哉

貴会とセミナー・ハウスの知的創造活動の発展を心から祈念して居ります。  
上越教育大学教授 二谷貞夫

近年は余り利用する機会に恵まれません。緑樹の中のセミナー館を絵がきで拝見し、いざれ訪れたいものと考えています。  
明治学院大学教授 松島 恵

そのうちに久しぶりではありませんが、一度お世話になりたいと考えております。小生はあと一年半で停年ではあります。  
学習院大学教授 岡本哲治

健康の内に還暦を迎えることが出来そう。有難く思っています。  
都立科学技術大学教授 宮野三郎

町田市立自由民権資料館からこちらへかわりました。

国立歴史民俗博物館助教授 新井勝紘

聖イグナチオ教会のボランティアとして、フィリピンの僻地(ホロ・コタバト)を訪ね、貧困にある病者、児童を励ましてきました。今年も65歳の誕生日を現地地で迎えることができました。  
元高校教諭 村上光雄

昨年ヨーロッパに留学しており、滞納となっており。本年五月は帰国早々で失礼しました。ここに二年分まとめて納入します。  
慶応義塾大学 伊藤喜栄

## 寄付金 報告

90年3月～8月

### 〈一般寄付金〉

三〇、〇〇〇円 (助) 大学セミナー・ハウス 元職員 小柳アヤ子殿

一〇、〇〇〇円 東京理科大学 大澤綱一郎ゼミ殿

一〇、〇〇〇円 フリーライター 中川信殿

二六、五〇〇円 第151回 大学共同セミナー殿

二八、六五五円 第152回 大学共同セミナー殿

〈植樹〉

はなみずき1株 都民生協新入職員殿

はなみずき1株 第10回社会合同セミナー殿

はなみずき1株 東芝エンジニアリング株

はなみずき2株 東芝デザインセンター企画殿

はなみずき1株 助) 大学セミナー・ハウス旧職員

はなみずき1株 日豪合同セミナー

はなみずき1株 国際基督教大学心理学

はなみずき1株 大学英語教育学会

はなみずき1株 日本作業療法士協会

はなみずき1株 教育部畑尾セミナー殿

## 大学セミナー・ハウスのインパクト

東京学芸大学物理学科助教授 並河 一道

大学セミナー・ハウスが開館して今年で25周年を迎えるに当り、開館当初、大学共同セミナーに参加していた者として、また最近では学生の指導にハウスを利用している者として、大学卒業後の小生の学問形成に少なからぬ影響を与えた大学セミナー・ハウスのインパクトについて考えてみたい。

理系の学生が文系の、あるいは文系の学生が理系の一般教養科目の講義を受講することの意義は、何よりもそこに学問を学問でないものから区別し、それを特徴づける普遍的性質が見出され、学問の方法を理解する鍵が存在することにありと考えられる。しかしながら学生がどう動くかという動機でそれらを受講し、そこから何を学んでいるかについては、昔私が学生であった頃も今もあまり変化はなく、単に卒業の単位をそろえるためやむをえずあるいは対象に興味を感じたためそれらの科目を選択し、その結果あるいはつまらなく、あるいは面白く思っているように見受けられる。教養科目の理念と現実のこのようない違いが何に起因するかを考えると、通常の大学の講義では、学生はこれらの科目あるいは主題を単なる学習の対象としてとらえており、これらが先に述べたような事柄を考へる契機を与えるものであり、そのような思考の対象であるというようならえ方が出来ないところに問題があることに気づくであろう。

このことの原因はひとえに学生どうしで、あるいは学生と教師とが対象について議論をするという行為の欠如にあると考えられる。議論することによってはじめて問題のとらえ方に関する各人の内面的発展の可能性が発現すると言えよう。

このような観点から見ると、大学セミナー・ハウスの意義は重要で、"plain living" と "high thinking" に "heavy discussion" を加えた大学セミナー・ハウスのあり方こそが、現代の大学の教養課程の真の目標に込められていると考えてよいのではないだろうか。

# 業／務／通／信

90年6・7・8月  
夏3カ月の合宿研修から

猛暑が殊の外厳しい夏であったが、多忙な研修スケジュールをこなす人びとの真剣な表情は、今夏も変わりがなかった。真夏日が続いた8月について言えば、昨年より千人以上も多い、六、九一人がこの丘で自己啓発の夏休みを過ごしたことになる。そして、急速に進む「国際化」を反映するかのようには、小さきまごまの、内外人の活発な交流が、この夏はひときわ目立った。

## ●7月5日——25年目の開館記念日——

7月5日に、ハウスは65年のその日から数えて「四半世紀」の時を刻んだ。当



①平和の祈り——「文教研」の参加者ら70名が「真理の鐘」を点鐘して（教師館屋上）〈90.8.6〉

日は昼食時に、岡宏子館長が国際基督教大学心理学科サマーセミナーなど三グループを前に挨拶した。また、この日の喜びを分かちため、在泊者全員と職員に紅白のお菓子が配られた。

開館以来の宿泊利用者の累計は延べ一二万九三四七人にのぼった。グループ数にして二万四、〇五九回であった。ここでは、この「歴史」に参加してこられたすべての利用グループを「代表」して、「常連」グループをいくつかご紹介しておきたい。

まず、7月5日にめぐり合わせたのは(1)国際基督教大学心理学科サマーセミナーである。今夏、10回目をマークした。(2)十大学合同セミナーは今年で18回目を迎えた。大学間交流を着実に実践し、学生主体の運営もすっかり定着した。今回のテーマは「国際社会の展開——90年代の世界」。最終セッションで、分科会別



②ユーカリを記念植樹するダルリンブル駐日大使——日豪合同セミナー 〈90.6.3〉

の宣言の形で、『十大NOTE』を発表した。

次はいずれも、今夏、20回目を記録したグループである。(3)大学英語教育学会(JACET)夏期セミナーは、開館の翌年、'66年に当ハウスで第1回を開催して以来のおつき合いが続いている。折しも、セミナー開催中に、学会の育ての親・故小川芳男先生の訃報が届き、関係者やハウス職員は悲しみを深くした。英語教育に尽くされた故小川芳男先生を偲び、

JACETの小池生夫・慶応義塾大学教授、松山正男・神奈川大学教授のお二人から追悼文をお寄せいただいた(次頁に別掲)。(4)文学教育研究者集団「夏の全国大会」は70年以来的連続20年の利用であり、今夏も8月6日の広島原爆記念日には恒例となった「真理の鐘」を点鐘し平和の祈りを捧げた(写真①)。(5)東京学芸大学「文章文法研究会」も20回目を



③立教大学観光学科の「国際交流セミナー」に参加したインドネシアの学生たち——後例中央は大橋泰二教授

迎えたグループである。永野賢・同大学名誉教授が主宰されているもので、ゼミのOB・OGを中心とした年1回の再会合宿である。

他に、'67年以来、連続利用で24回目を迎えた(6)お茶の水女子大学新入生セミナー、ゼミOB9名による再会合宿をつづけて、在学中から通算して25回目を迎えた(7)東京理科大学の大沢綱一郎教授があげられよう。

## ●国際交流の諸集會から

夏になると、ハウスの丘はひときわ豊かな国際交流の場に転ずる。二つの日韓学生交流(14頁に別掲)はその代表格であったが、他にも次のように、さまざまな集會が行なわれた。

(1)第11回日豪合同セミナー「太平洋に架けるMATESHIP」には日帰りを含め三五〇名が参加した。最終日にR・ダリンプル駐日大使が来館し、各界のボランティアからなる実行委員たちとユーカリ1株を記念植樹された(写真②)。

(2)日ソ学生会議準備委員会  
来年、モスクワで開催予定の第1回日ソ学生会議に向けて、討論と準備のためにモスクワ大学院生2名と日本側実行委員らが合宿した。秋元直委員長(上智大学3年)らが88年訪ソして草の根交流を提唱したことが契機となった。現在、メンバーは首都圏11大学の30人である。

(3)国際ロータリー「異文化交流セミナー」  
滞日中の外国人留学生39名と外国に派

## 追 想

故 小川芳男先生と

J A C E T 夏期セミナー

—— 大学英語教育の拠点

—— づくりに参加して ——

### 大学英語教育改革と

大学セミナー・ハウス

慶応義塾大学教授 小池生夫

大学英語教育学会（J A C E T）の第二四回目サマーセミナーは、本年七月三十日から八月五日までの一週間、大学セミナー・ハウスで開催された。昭和四十二年夏に第一回セミナーを、創設二年目のハウスで開催してから、ほとんど毎夏、J A C E T はハウスのお世話になってきている。この間、多数の参加者が全国の大学から集い、英語の訓練のためにイングリッシュ・ヴィレッジに日本語を使わずに生活を共にし、英米両国から秀れた学者を招いて、英語学、英語教育などに関する講義を受けてきた。そして、大学英語教育に関するレポートや討議を続けたのである。この中から、J A C E T の活動に積極的に参加する人々が集り、その中核として活動を行ってきた。私もその第一回参加者の一人であった。こうしてわが国の大学英語教育の改革運動の中には、J A C E T セミナーに参加し、会員になり、共同して、改革にあたることを誓いあつた一握りの人々もいたのである。私たちは、地の塩であつた。それで

十分であつた。掛声よりもまず実行であつた。それほどなすべきことが堆積していた。しかし、幸いなことに社会の流れは、私たちの運動に支持を与えるものであつた。セミナーの参加者はやがて延九百人以上に達し、英米からの講師も三十六人に達した。参加者は時期は違つてもハウスで「共に同じ釜の飯を食べあつた仲間」であり、共感がある。

この運動の頂点に十六年間おられた小川芳男第二代会長は、J A C E T サマー・セミナーのたびに出席され、セミナーの実行委員や参加者を激励された。その先生が亡くなられたのが、七月三十一日未明、本年のセミナーの二日目であつたことは、シンボリックなことであつた。先生は長く、大学セミナー・ハウスの評議員でもあつた。ここに先生の御冥福をお祈りしたい。小川先生が亡くなられ、また、この二年で、あいついで英語教育



1 週間にわたる夏期セミナーを終えて——前例左から 5 人目が小池生夫氏、右端が松山正男氏。 ('90.8.5)

界のリーダーが亡くなられ、英語教育界は新しい時代へと転換していく時期に入ったと言えよう。

今が転換期である証拠は、こればかりではない。この十年間、わが国の経済大国としての興隆が、経済活動を国際的により拡大させる状況をもたらした。国民の英語への関心はますます強く、外国語、特に英語使用の質と量の向上を促進した。明治・大正・昭和の初期に、英文和訳を中心にして、先進西欧文明の文化・技術の輸入にとどめた英語教育は、いまやはるかに拡大の必要をおぼえている。それは、相互コミュニケーション能力の

養成が格段に劣っている状況を修正する方向へと動いている。私たちが十一年間全国的スケールで、四回実施した英語教育の実態調査は、まもなく完結するが、それによると、社会人や大学生は、コミュニケーション能力の養成が明らかに不足

しており、その力を格段につけることを英語教育の主たる目的にしてほしいと望んでいる。中学英語教員、海外子女教育に従事した先生方も、これと同じ方向である。それに対して、大学英語教員の過半数は、教養面をより重視し、専門教育の補助にと英語教育の目的を考えている。高校英語教員もその線である。この教育目的意識や価値観の混乱は、当分続きそうである。一方、政府の英語教育の目的設定は重要で、これによって、行財政の方針が動くのである。臨教審や、教育課程審議会の答申及び学習指導要領改

遣される日本人学生が2泊し、交流した。(4) ライフ・ミニストリーズ

夏休み中、日本各地で奉仕活動に従事したアメリカ人学生一〇名が、帰国前に総括合宿を行なった。

(5) 立教大学観光学科「国際交流セミナー」ホテルマンを目指すインドネシアの男学生12名が2泊した（写真③）。

(6) 中央大学「日独学生交流会」

日本語を学ぶ西ドイツ・ヤポニウム（日本語学校）の学生19名が宿泊し、中央大学の学生と交流した。

(7) アメリカ人学生のオリエンテーション合宿

国際教育交換協議会（C I E E）と桜美林大学が提携して実施しているプログラム「日本の経済・経営セミナー」に参加する米国21大学の学生30名が、来日後のオリエンテーションで3泊した。

### ●夏休みも健在なり——ゼミ合宿

全国的・国際的集會など夏特有の利用状況の中で、休暇中も熱心に続けられているゼミや研究室の合宿を忘れることはできない。立教大学・栗原彬、東京理科大学・狩野紀昭、高橋武則の両ゼミはこの夏二回の来館であった。東海大学・師岡孝次研究室、東京理科大学・沖塩莊一郎（建築）、駒沢大学の谷敷正光、寺中良二、東京大学・長尾龍一の各ゼミなどはいずれも夏の常連である。二年ぶり七回目の合宿で二泊した法政大学石谷行ゼミ（平和学—行動と思想）はメディアテ

定において、外国語教育はコミュニケーション能力の積極的養成に主なる目的をおくと定めた。その処置はこの方針にそって一層推進されていくであろう。英国から二千人を超す若人が招聘されて、全国各地で指導助手として、教室で英語を教えているのも、その教育政策の一環である。また、外国語は英語と決まっていた中・高等教育に少しでも多様な外国語を導入しようという計画もはじまった。小学校に英語教育を導入しようという試みは、私立小学校を中心とする現場先行型で拡大中である。この流れの中で大学の外国語教育は、今後どのような動きを示すであろうか。大学審議会で提案中の大学設置基準の改正は、一般教育課程の自由化を含み、単位の取得方法、授業方法など、外国語教育の抜本的改革の可能性が生れてきそうである。さらに、大学進学人口の減少がもたらす大学生存競争は、外国語教育の改革を促進するであろう。大学の英語教育は、その中核である。その形態は多様化の方向に進む。

従来通りの伝統的な形態は、最初は大きく変化することはないであろう。しかし、I C U型集中訓練、亜細亜大学型多量留学、五十分授業、少人数制、専門研究補助型、教養主義、単位交換制度、検定試験による認定など、次第に各大学の外国語教育の創意工夫が姿を現わすようになることを望んでいる。その中で、J A C E Tは、各大学の情報交換援助、外国語教育の規準の策定、ファカルティ・ディ

ヴェロブメントの工夫など、ますます重要な活動を展開しなければならぬであろう。

### 「小川ベンチ」——生涯の師と友

との出会いのシンボル——  
神奈川大学教授 松山正男

初秋の夕べ、小川芳男先生が寄贈された「小川ベンチ」に坐り、二十四年前の丘に来てから出会った人々や学んだことに思いを馳せました。大学セミナー・ハウスこそ生涯の師や友との出会いの場所でした。

一九六六年第一回J A C E T（大学英語教育学会）夏期セミナーに参加し、心から尊敬する二人の師に出会いました。一人はセミナー・ハウスの創立者の飯田宗一郎先生です。夢が現実に実現できることを目の前に示してくださいました。もう一人はJ A C E T第二代会長の小川先生です。当時は学生紛争が激化し、先生は東京外国語大学学長を辞任され、J A C E Tに余生を捧げると宣言されました。そして一九八四年に現会長梶木隆一先生と交替されるまで十六年間会長の重責を果たされました。夏期セミナーのために寝食を共にし、大学英语教育改善のために深夜まで熱弁をふるわれた小川先生の姿が今も目の前に浮かびます。本年の七月三十一日、第二回夏期セミナー開催中に先生が他界されたのはあまりにも象徴的事件でした。先生の自伝『私は

こうして英語を学んだ』（T B Sブリタニカ）にセミナーへの先生の熱意が述べられています。

J A C E T夏期セミナーもこの二十四年間、何回か壁にぶつかりました。しかしそのたびに小川先生は、「きみたちが弱気をおこしても、私一人でもやっていくよ」と言われ、その気迫に圧倒されました。初め百五十名で発足した大学英语教育学会が、今や二、〇〇〇名を越す大組織となり、社会的発言力をもてるようになったのは、小川先生と大学セミナー・ハウスの存在によることは明らかです。本学会の役員の大部分が大学セミナー・ハウスでの生活体験者であるから、大学院セミナー館、国際セミナー館、20周年記念館がオープンするたびに優先的に使わせていただきました。全国各地で会員に会うたびに話題に上るのはセミナーの思い出です。

特筆したいのは今夏使用した20周年記念館のすばらしさです。英米の学者も満足していました。二十一世紀を目指し大学セミナー・ハウスがさらに活用され、私達が体験したような素晴らしい出会いがおこることを心より祈っています。こうした出会いの場を陰で支えて下さっている職員の方々に感謝します。小川ベンチに坐っていると、いくつもの記念植樹のあいだから笑顔をたたえた小川先生が現われてくるような気がします。先生の霊がセミナー・ハウスを守ってくださいていると確信します。

ションやヨガの訓練で、記念館の瞑想室を本格的に利用した最初のグループであった。

### ●今季新入生合宿に延べ約一万人

6・7月中に行なわれた新入生合宿研修（オリエンテーション）は6グループ、延べ一、〇四一人であった。そのうち初めて実施されたのは東京学芸大学心理臨床学科と日本女子大学（西生田新キャンパス）人間社会学部教育学科であった。なお、4月以降今季4ヵ月間に実施されたクラス単位以上の規模の合宿は別表のとおりで、計64グループ（34校）、延べ九九六六人（うち教職員七九五八人、上級生は八一〇人）であった。同期間の総宿泊者数の45%を占める。

### 新入生オリエンテーション合宿実施状況 平成2年6～7月

学 校 名	参加者数
● 6月	
東京学芸大学・心理臨床学科	36 (4)
早稲田大学・建築学科	199 (11)
● 7月	
日本女子大学・教育学科	181 (10)
お茶の水女子大学・ 文教育学部	261 (24)
お茶の水女子大学・ 理・家政学部	303 (26)
東京都立大学・建築工学科	61 (22)
計6グループ (5校)	1,041 (97)

平成2年度（4～7月）の集計

計六四グループ（三四校）

実人数九、〇九四（七六二～六九二）  
延人数九、九九六（七九五～八一〇）

（注）参加者数の（ ）内は教職員、へゝ内は上級生とともに内数。（14頁につづく）

●さかな「日韓交流」

「近くて遠い」韓国が、この夏ぐっと身近に感じられた。両国の若者たちが、ハウスでこれほど活発に接触・交流した夏を知らない。7・8月中に行なわれた「日韓交流」の集会は計5件。参加者は三二名（うち韓国人九二名）、延べにして八一一名（同四四一名）であった。

恵泉女学園短期大学英文学科の総合科目「国際」は、81年に発足以来、毎年合宿セミナーを実施している。毎回、外国人ゲスト講師が招かれているが、10年目を迎えた今回は、釜山女子大学の二八名（うち教師二名）を招へいして開催された。総勢二一〇名が「現代史の諸問題と課題」をテーマに13のグループに分かれて討論が行なわれた。

合宿のあと、韓国人学生は日本人学生の家にホームステイした。かれらは相互に生涯忘れえぬ「異文化体験」の夏を過ごしたことであろう。一ヵ月後、韓国を旅し、釜山女子大学で来日した学生との再会を果たした神尾奈穂美さんに、この夏の一連の体験と感想を綴っていたのだ（「私の国際交流」その1）。

7月末から5泊6日で「日韓学生会議」が開かれた。「学生の、学生による、学生のための会議」をモットーに85年に発足、以後東京とソウルで交互に開催されており、通算5回目を迎えた。ハウスでは一昨年に続いて2度目である。参加者は、来日した韓国人学生一八名（11大学）を加え五三名。「新たな躍進——実り

ある日韓交流へ」をテーマに六つの分科会討論（政治経済・歴史・意識・教育・人権・環境）や、文化紹介、キャンペーンフェアなどで交流の実を上げた。実行委員の一人で、昨年のソウル大会に続いて同会議に2度参加した川竹大輔さん（東大文科2年）に、相互理解と信頼を深めたこの夏の体験をご紹介いただいた（「私の国際交流」その2）。

私の国際交流 日韓学生交流二題

（その1）

「国際」合宿と韓国訪問を体験して

恵泉女学園短期大学英文学科1年 神尾奈穂美

総合科目「国際」の最後をしめくくる合宿セミナーは7月20・21日の両日、韓国釜山女子大学の学生二十数名と合同で行われた。合宿では韓国と日本の学生が歴史の受けとめ方の違いや今自分達の考えていることを巡り、時には激しく本音で話し合った。その一ヵ月後、私は約一週間のプログラムで韓国への研修旅行に参加した。今度は釜山女子大学の恵泉の私たちを受け入れてくれた。韓国で彼女達に再会した時の大きな喜びは、彼女達と本音で話し合った経験の実りの一歩であると思った。

韓国は日常会話は日本語で不自由しない。また私のホームステイ先のお父様は日本語が母国語のように上手だった。日本語が上手であるという事の裏には日本が朝鮮半島を侵略して日本語を強制し、朝鮮人を苦しめた事実が四十五年経った今でも消えずに残っているのだ。私には大きなショックであった。それにもかかわらず訪問する先々で出会った沢山の韓国人は私達に親切で友好的であった。韓国は二年前のオリンピックを契機に急激な発展をとげた程度のことでは知っていたが、自分



釜山女子大生との合宿のひとつ  
<90.7.21>

の目で見た韓国は私の想像をこえていた。町並みは日本に似ているし、寺院の建築様式からも日本が韓国の影響をうけたことが良く分かった。習慣もどことなく似ていてとても異国にいる気はせず、逆に親しみを感じた。韓国の学生達の勉強の熱心さには圧倒された。日本の学生は豊かさや自由さに慣れ切って、勉強にも身を入れず、社会・政治・世界の動きにも全く関心を示さない。これから日本を背負っていく私達のような若者の世代は現実を目を覚まさなくてはいけないのではないかと、私はもともと韓国は発展すると思う。そして、日本の手のとどかない遠くへ韓国が行ってしまうような気がした。これからの日本が良くなるのか悪くなるのかは私達にかかっているというこの重大さに気がついた。合宿と韓国訪問での体験とそこで得た多くの韓国人の友人は私の宝物である。

（その2）

対立やすれちがいを重ねる中で生まれる信頼感

第5回日韓学生会議実行委員 東京大学文科2類2年 川竹 大輔

今年の日韓学生会議への参加は、私自身にとっては昨年のソウル大会に続いて2回目のことであった。昨年はなぜ日本人と韓国人であるというだけで「大きな意識差」が生ずる

のだろうと考えていたのに対して、今年はそのれが生まれる背景の存在とその理解を解すること、共通の意識を持つためには何が必要であるかを考えることができた。

「日韓学生会議」は、日韓両国の学生が特定の政治・宗教にとらわれず、率直な討論を通じて相互理解と友情を深めることを目的とした、学生自身により運営されている団体である。今年の東京大会で第5回となり、隔年の東京開催のときは引き続き大学セミナー・ハウスのお世話になっている。

討論は、ややもすれば感情的に対立しがちななり、国の代表である意識を持っている韓国人メンバーと、何かをしたいけれど何をしたいかわからないまま国を背負うことのできない日本人メンバーとで、大幅に論点がずれてしまいがちであった。

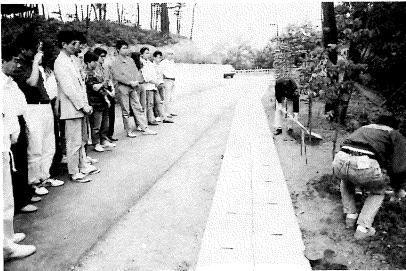
しかし、見逃してはいけないのは、対立やすれちがいを重ねるなかで、お互いに自分達が真心のままに語っていることを確認できたことである。この確認を土台として、相互の信頼感が生まれてくるものなのだろう。来年は、韓国のソウルで日韓学生会議夏大会が開かれる。そして、再来年には東京で。そのなかで、私が望みたいことは、日本側と韓国側といった分け方のみではなく、男性と女性のような分け方を持ち込んでの日韓ごちゃまぜの討論をやってみようということである。意識の壁を超えねばならないのに、互いを何々人との枠だけで分けるのは適当でないと思うからである。



6つの分科会テーブルを設けて  
(大学院セミナー館) <90.8.4>

# 利用状況

\* 11 同月 2 回利用  
 \* \* 11 同月 3 回利用  
 日帰りを除く



ハナミズキを記念植樹する東芝デザインセンター——記念館への通路で〈90.6.1〉

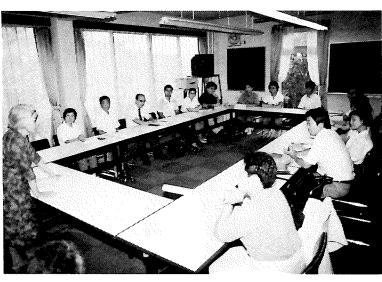
- 6月(62グループ、延二、八三五五人)
- 東京理科大学教授 山田 善靖
  - 立教大学教授 栗原 彬
  - 中央大学教授 川辺 康男
  - 電気通信大学講師 横田 誠
  - 一橋大学教授 竹内 弘高
  - 明治大学教授 長谷川昭彦
  - 東京工業大学教授 小林 彬
  - 千葉大学助教 服部 岑生
  - 東京学芸大学助教 金谷 憲
  - 東京学芸大学助教 岸 学
  - 早稲田大学建築学科新入生オリエンテーション
  - 中央大学教授 椎橋 隆幸
  - 東海大学教授 師岡 孝次
  - 東京理科大学教授 狩野 紀昭
  - 東京理科大学助教 高橋 武則
  - 明治学院大学教授 宮野 彬
  - 共立女子大学教授 永山 榮子
  - 東京女子大学教授 栗原 福也
  - 東京外国語大学教授 宇佐見 滋
  - 東京理科大学人間関係ワークショッ  
プリユニオン
  - 中央大学教授 高橋 治男
  - 帝京大学明日の会 伊藤 寿英
  - 中央大学講師

- 国際基督教大学教授 新津 晃一
- 東京大学教授 和田 英一
- 東京農工大学教授 小山 昇
- 帝京山梨看護専門学校
- 青山学院高等部
- 創価大学社会科学科合同研究合宿 山口 和子
- 創価大学教授 山内 和子
- 獨協大学助教 渡辺 学
- 日本女子大学附属高等学校高校生活 研究セミナー
- 阿佐ヶ谷美術専門学校 郡内研究会
- 大学天文連盟変光星分科会
- 第152回大学共同セミナー
- 第18回十大学合同セミナー
- 日本建築学会農村計画委員会
- 第11回日豪合同セミナー
- コンピュータ研究会
- 崇教真光
- 東芝デザインセンター
- ベスト外国語学校
- テクニカルサプライ
- 富士ゼロックス
- ヘキストジャパン
- ウチダゴジコム
- 日本インフォメーション・エンジニ  
アリング
- コーセー化粧品販売
- 山村硝子
- 都立民営施設労働組合連絡会議
- バイオニア労働組合
- 安川電機製作所
- 日本航空電子工業
- 東芝労働組合日野支部
- 横河メデイカルシステム
- 三友
- (個人利用)
- 工業所有権研究会 清野 光男
- 東洋大学教授 堀 昌司
- V研究会\* 吉本 用治
- 安田精工 小倉 用治
- 7月(92グループ、延五、三〇三三人)
- 日本女子大学教育学科新入生オリエンテーション
- 日本大学農獣医学部海外研修旅行事前研修
- 東京理科大学教授 沖塩 莊一郎



恵泉女学園短期大学「国際」セミナー (P.14参照) 〈90.7.21〉

- 国際基督教大学心理学夏季セミナー
- 立教大学教授 栗原 彬
- 上智大学教授 松本 栄二
- 東京外国語大学教授 若林 俊輔
- 駒沢大学助教 谷敷 正光
- 東京都立大学助教 鳴澤 實
- 東京都立大学助教 石野 久彌
- 芝浦工業大学教授 十代田知三
- 杏林大学教授 椎名 和男
- お茶の水女子大学文教育学部新入生セミナー
- お茶の水女子大学理・家政学部新入生セミナー
- 早稲田大学教授 川原 栄峰
- 立教大学教授 大橋 泰二
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 東京理科大学助教 高橋 武則
- 中央大学教授 池田 正孝
- 東京都立大学教育学研究室院生会
- 東京都立大学助教 日向野幹也
- 東京大学教授 平野 敏右
- 日本大学教授 松本 博一
- 杏林大学教授 栗田 陸雄
- 中央大学教授 村越 邦男
- 埼玉大学教授 茨木 俊夫
- 東京学芸大学教授 福島 脩美
- 恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」
- 駒沢大学教授 中村 昭之
- 法政大学教授 中川 作一
- 早稲田大学コンツェルト
- 東京理科大学教授 川端 良二
- 駒沢大学教授 寺中 潔
- 東京大学教授 平澤 洽



芝浦工業大学職員研修会——歓迎の挨拶をする岡館長 (記念館) 〈90.8.30〉

- 法政大学教授 石谷 行
- 上智大学教授 小川 捷之
- 中央大学助教 塩見 英治
- 東京都立大学建築工学科新入生オリエンテーション
- 駒沢大学教授 小林 英夫
- 東京都立川川・商科短期大学茶道部
- 東京工業大学助教 徳田 雄洋
- 東京工業高等専門学校韓国専門大学 研修生
- 日本大学教授 河合 義和
- 明星大学通信教育部
- 中央大学通信教育部 中尾 堯
- 立正大学教授 中尾 堯
- 大阪大学歯学部サッカー部
- 東京都立神代高校 堀江浩一郎
- 八千代国際大学助教 堀江浩一郎
- 共立女子第二高校ESS部
- 獨協大学講師 林 俊一
- 恵泉女学園大学教授 蓮見 博昭
- 和光大学教授 服部百合子
- 郡内研究会
- 日ソ学生会議準備委員会
- 日本ワイイルド協会
- 日本精神科看護技術協会\*
- 山村正夫小説講座
- 国際ロータリー
- インド音楽研究会
- 説教塾
- 国際教育交流協会
- 若手地震工学者の会
- 建築セミナー'90
- 多摩教育センター日本語研修所

- トミー植松語学センター
- 東電学園大学部夏季合宿
- 文学教育研究者集団
- ナチュラリスト環境教育センター
- 日本基督教団日野台教会
- 日本聖公会町田真光教会
- エヌ・エス・シー・エンジニアリング
- ウチダゴジコム
- ウニカ
- 東芝
- テージキー
- 酒井薬品
- 経営コンサルタント協会
- ヒューマンライフセンター
- 日野療護園
- フォワード
- 日本電気
- TWCABビジネススクール
- 11人の会
- (個人利用)
- 国際学生セミナー編集委員会
- V研究会\*\*
- 玉川大学助教 吉原 健吾
- 国際基督教大学学生 ロス・サイモン 甲斐 隆
- 駒沢大学教授 小林 英夫
- 8月(116グループ、延六、九二一人)
- 武蔵工業大学助教 土井 雅博
- 法政大学講師 宮脇 昇
- 立教大学教授 山田耕之介
- 駒沢大学講師 明石 博行
- 法政大学哲学会
- 明治学院大学教授 肥田日出生
- 駒沢大学教授 小林 英夫
- 東京理科大学教授 大澤綱一郎
- 国際基督教大学教育セミナー
- 東京学芸大学教授 小川 仁
- 千葉大学教授 田中 國昭
- 東京学芸大学文章文法研究会
- 東京学芸大学 松本 栄二
- 上智大学教授 松本 栄二
- 国際基督教大学助手 松本 栄二
- 明星大学通信教育部 松本 栄二
- 東京学芸大学助教 松本 栄二
- 東京外国語大学助教 松本 栄二
- 東京学芸大学助教 松本 栄二
- 中央大学通信教育部 松本 栄二
- 筑波大学人間関係ワークショップリ



並河一道・東京学芸大学助教授（前列中央）とゼミ生たち（P.10参照）〈'90.8.18〉

# 予 告

## ●第10回大学院共同セミナー

主題：現代戦後史の構造  
——地殻変動する世界の原点を問う——  
期日：1990年12月14日～16日（金～日）

### ◇ゲスト講演

戦後保守政治のパラドックス  
——なぜ日本で社民主義が育たなかったのか——  
朝日新聞東京本社編集委員 石川真澄氏

### ◇講義と演習指導

1. 地殻変動の世界像  
——ヘゲモニーの崩壊と第三世界をめぐる——  
筑波大学社会科学系助教授 進藤栄一氏
  2. 冷戦の起源と中東——帝国の原点——  
一橋大学社会学部教授 油井大三郎氏
  3. 戦後改革と高度成長のあいだ  
——日本資本主義の位相変換——  
青山学院大学経済学部教授 三和良一氏
  4. 憲法体制と安保体制の相克  
——パクス・アメリカーナの光と影——  
和光大学経済学部教授 古関彰一氏
  5. 冷戦の起源をめぐる  
——東欧と社会主義——  
広島大学法学部助教授 林 忠行氏
  6. ソ連、朝鮮そして東アジア  
——再び社会主義について——  
東京大学社会科学研究所教授 和田春樹氏
- ◆運営委員  
筑波大学社会科学系助教授 進藤栄一氏

◇問い合わせ先＝企画室 ☎0426-76-8532(直通)

ユニオン  
中央大学教授  
お茶の水女子大学教授  
駒沢大学教授  
早稲田大学教授\*  
中央大学松柏会  
武蔵大学教授  
東京大学教授  
筑波大学教授  
筑波大学講師  
学習院大学教授  
慶應義塾大学英語会\*

川路 山形 赤塚 私立 平澤 寺中 黒田 齊藤  
神治 敬志 和美 保彦 茂一 良二 淑子 良夫

東京工業高等専門学校教官研究会  
東京工業高等専門学校日豪学生交流  
実行委員会  
埼玉大学教授 清水 寛  
明星大学教授 森下 恭光  
筑波大学教授 國分 康孝  
東京大学教授 長尾 龍一  
日本ルーテル神学大学「カウンセリ  
ング研究所」セミナー  
桜美林学園教職員組合  
明治大学短期大学教授 玉田 弘毅  
十文字学園女子短期大学箏曲部  
常磐大学教職課程  
東京都立公衆衛生看護専門学校  
東京大学ハンドベルクワイア  
聖学院ハンドベルクワイア  
玉川大学通信教育部学校劇研究会  
千葉明德短期大学ハンドボール部  
神奈川大学助教授 深澤 俊昭  
帝京技術科学大学助教授神尾真知子  
東京神学大学公開夜間神学講座  
桜美林大学国際交流センター  
神奈川県立津久井高校演劇部  
神奈川県立百合丘高校生徒相談係  
東京都立立川高校英語部  
東京都立立川高校英語部  
佼成学園高校数学研究同好会

八王子市立横山中学校  
世界経済研究会  
日韓学生会議  
歴史学研究会  
大学生ITC  
関東学生オリエンタリング連盟  
日本YMCA同盟学生部  
経済政策史研究会  
心理学を楽しく学ぶ会  
臨床心理研究会  
フランス語教育振興協会  
小教研学級経営案サークル  
八王子数論サマースクール  
大学英語教育学会  
ことばときこえの研究会  
日本基督教団日本橋教会  
文学教育研究者集団  
多摩教育センター日本語研修所  
東京リコーダー協会  
日本作業療法士協会  
数学おちこぼれセミナー  
C+F研究所  
子どもとつくる生活文化研究会  
日本イエス・キリスト教団荻窪栄光  
教会

## ●編集後記

●暑さがこのほか厳しかった日々を思い起こしながら、6～8月の活動を中心とした本号の編集を終えましたが、表紙には「秋」を満載してお届けできることをうれしく思います。題して「秋の八花撰」は、三年前に春の草花を表紙にして以来、大事にしていたものです（表紙写真の説明は9頁に掲載）。撰者である吉田幸弘先生は、この間、東京都立川短期大学教授から名誉教授になられました。春この丘に咲く花々をスライドにおさめ、毎年5月、新入生オリエンテーションの折に映写してこられたのですが、この秋号の表紙のために、先生は、昨秋、何度か足を運んで撮影して下さいました。

●「業務通信」にもあるように、7月5日で当ハウスは開館25周年を迎えました。昨年、20周年記念館の落成行事が行なわれましたので、今年には特別な催しがありました。今年が、25年の歴史に連なるゼミや研修グループの方々が、この夏、私共の喜びを共有して下さいました。ただ一つ悲しい出来事は、開館二年目に発足して以来、ハウスと歩み

練馬神の教会  
国立学院予備校  
東京言友会  
農業科学文化研究所  
英語教育協議会  
ライフ・ミニストリーズ  
教育技術研究会  
日本聖公会第10回部落解放セミナー  
高橋聖書研究会  
東京都渋谷区教育委員会  
東京都高等学校英語教育研究会  
エイ・エフ・エス日本協会  
21世紀の心理学の会  
ネイチャーゲーム研究所  
八南作文の会  
国際ロータリー

東芝生活文化研究所  
田谷\*  
カネシロ  
国際交流サービス協会  
ココカ  
ドメスエ化粧品販売  
ドメスエ  
〔個人利用〕  
韓国全南大学講師 裴 泰聖  
昭和女子大学大学院生\*樋口 静江  
区立深川第四中学校 南出 新治  
明星大学通教生 千葉 禮子  
フリーライター 中川 信  
芝浦工業大学教授 十代田知三  
日本友和会 政池 節子  
第一工房 西崎 寿志

●「業務通信」にもあるように、7月5日で当ハウスは開館25周年を迎えました。昨年、20周年記念館の落成行事が行なわれましたので、今年には特別な催しがありました。今年が、25年の歴史に連なるゼミや研修グループの方々が、この夏、私共の喜びを共有して下さいました。ただ一つ悲しい出来事は、開館二年目に発足して以来、ハウスと歩み

●「大学セミナー・ハウスのインパクト」(10頁)は、大学共同セミナーに開館当初、参加された並木一道・東京学芸大学助教授(物理学)による大学教育論です。タイムリリーに25周年を祝つて下さるものとなりましたが、教養科目の理念と現実の乖離に苦悩する大学人の目に、セミナー・ハウスがively discussionのある場として映っている、そのことの裏側にある大学教育の現場を思うと、このお祝いも心から喜ぶことのできない心境です。(能)